

二言、三言、世迷い言(十一)

宗内 敦

* 世情に放言、また楽しからずや

―ブログ開設―

ネット社会は、まさにブログとツイッタ―の花盛りである。この歳になつては、さすがに一言つぶやき型のツイッタ―はうすら悲しくてやりきれないが、ブログなるもの、いつか、つれづれなるまま憂さ晴らしに手がけてみてもよいとは思っていた。何よりもあちこち無料レンタルサイトというのがいい。『琅』はせいぜい年に一度くらいし

か出せなくなってきたので、ときには年寄りの色艶放言でも混ぜて思いの丈をちよつぱり語ってみる場として使うのも一興と、人並みにネット社会に向けて二言三言つぶやいてみることにした。

それが何と、始めてすぐに、此度の東北・東日本大震災と原発大事故。そしてその後の、無能・不道徳な政治家どもによる政治災害。思わず知らず、そこにテ―マが偏り、世を憂い、政治をのろう恨み節とはなった。が、それもまたよろしからずや。下記のごとき言いたい放題、

他人から見たらおもしろくも何ともないが、ご本人からすれば、世の中・人生をちよつぱり斜めに眺め、ときには大まじめにもなったつもりで、それなりなかなか愉快、膨れる腹中のコンプレックスをはき出す癒しの場でもあった。せつかく書き綴ったものだから、未熟・未完のものもあるが、その折々の自分を振り返る意味でも貴重な資料、手を加えずに採録して、いつかは書き改めるエッセイの苗床として置きたい。

しばし、お付き合いいただきたく…。

* 事始め

遅ればせながら、ブログなるものを始めることにした。が、物忘れも日ごと夜ごとに深まりくる、寄る年波には勝てないのだろうか。まずは「事始め」と書いたは良いけれど、〈事〉は平仮名だったか、〈始め〉もまた平仮名だったか、はたまた〈初め〉だったかと、確信もなく…、と船出でつまずく。でもいいか、何処に行く

ともわからないからこそ楽しいネット航海日記を、早速始めよう。

とは言え、始めた動機は何だったか、それも定かではなく、これもまた心もない。ただ一つ確信的に言えるのは、酒は涙かため息か、心の憂さの捨てどころ、でも言うべき、心の船泊りを求めてのことだった。酒を相手に、いやいや誰を相手にすることもなく、また誰に気兼ねすることもなく、世を憂い、愚痴をこぼし、そして心をいやして元気をもらい、あしたに続く船足をこぐ。ああ、楽しからずや。

とりたててのテーマもなく、さて折々に、さまざまに、思いの丈を綴っていくう。(11・1・16)

ネット訪問者の拍手1

* ネット社会の生き方を思う。

びつくりした。

エッセイ・教育・同人誌『琅』など間口の大きい私のホームページ(私と

『琅』のホームページ)。だが、お目見え以来もう10年以上も経っているが、1日ほぼ10〜20そこそこのアクセス数に過ぎない。それが、この数日、けたたましくドアがたたかれ、連日、なんと30件を越えるご訪問の方々(たった30件などと言わないでください。私にとっては大変な出来事なのです)。それも、エッセイのページの中の「痴漢・セクハラ余話」に偏っている。何事かとしばしいぶかったが、すぐに了解できた。そのエッセイの中に、最近なくなった作家・和田勉さんのことに触れた部分があるのだが、それが手がかりになったのだろう。ふと思いついて、ヤフーなど検索エンジンをひいてみると、やはりそうか。和田勉さんをキーワードとするあるページのトップにわたしのこのエッセイが挙げられている。他の方々のアプローチの興味など拝見しながら、アクセス数の増加は良いが、とても複雑な気持ち。いままでそれほど感じたことはなかったが、ネット社会の

おもしろさと恐ろしさが身にしみるよう感じられた。

巧みにネットを操作すれば、善きことも悪しきことも、さまざまに社会に影響させることが出来る。せめて自分は、世の進化のために、このネットの力を善用していきたいと思つた、と、きれいな事言うのは簡単。これは本音か、欺瞞か、すべて向後のネット利用の興味で自分を知らぬことになるだろう。(11・1・20)

* 「一致団結」こそ、栄光への道

数年前、『琅』に書き、そしてネット上にも公開しているエッセイ「ジーコジャパンの敗因」。サッカーの大きな国際大会があると、その前後に訪問者が増え、数日前に終わったアジアカップの余韻が続く昨日・今日もまだ何人かの人が閲覧してくれている。その要旨は、もろくも崩れたジーコジャパンの敗因を、見事にまとまり結束力のある「なでしこジャパン」と比較しながら、時とともに日本人

社会から失われつつある「一致団結心」の欠如であると説き、再生の道もまたその一致団結心を取り戻す以外にはないと述べる、実にシンプルな内容であるが、ジョギヤパンの負け戦こそ、バブル崩壊後坂道を転がるように転落、世界有数の不況社会に陥っている日本国を投影するものではあった。さてこそしかし、再生の道は確かにあった。この度のザックジヤパンのメンバー、何処でどう学んだか、試合前から口々に「一致団結心」を唱えていたが、神の恩寵なるか、周知のごとき大成果がもたらされた。未だ個々のスキルは劣れども、大会優勝までの心気を初心として持ち続けられ、世界一流のサッカー国になる日も決して遠くはないとの実感がある。

翻って、政治の世界を見てみよう。ついに政治資金規正法違反で検察審査会の起訴議決に基づく強制起訴を受けるに至った小沢一郎氏を渦中の問題として迷走する政府・与党の不一致不団結の有様

はどうだ。小沢氏の罪の存否は置いて、国を預かる代議士連中の右往左往は、とても一國を担える人たちの集まりとは思えない。自民党崩壊からさらに進んでついに来た、「最高エリート集団」の末期的症状。こうした人々を選んだ我ら国民こそ哀れ。しかし、此度のザックジヤパンの自己犠牲に基づく一致団結こそ見事に、向後の道を示している。これを模範に、政治家諸君の猛省こそあるべし。国民の、国家の、社会の団結を揺るがす者は、事の善悪を訪わず、まずは表の舞台から降り、真に国民に奉仕の精神を有する者だけが党を組直して、国民にその信を問ひ、その上で政治を革新しなければ、日本の将来は無いだろう。

若きサッカー選手たちの涙ぐましい連帯・団結力と闘争心を見て、大いに感激、そして反転、いささか感傷的な感懐ではあった。お恥ずかしい。(11・2・1)

*** いじめの功罪…**

で頭がいつぱいだった。結局、庭の真ん中の主木たるヤマモミジを切って、そこに鎮座します事に落ち着きはしたのだが…。

それにしても、主木を切る発想はどこから来たのか。それは、20数年前、我が家を建て、一番初めに主木として植え、期待した木ではあったにもかかわらず、このモミジ、春先の葉の開き初めこそ、葉芽が朱色に膨らみやがて開きゆく風情はなかなかではあっても、肝心の秋には全く紅葉しないで、ただ枯れ落ち葉を生み出すだけなのである。これは、ひたすら老いゆく年頃になった我が身にとっては何とも何かが投影されるようで、見るだけで、はかなく切なくなってしまうのだ。全く予想だにしかかった、伐採の決断が突然やってきた次第である。と、忽然と、そのとき、この木を植えるにやってきた植木屋の若い職人の、あの言葉が思い出された。彼は、なんと言うこと、言うにことかき、聞こえよがしに「ち

えつ、いろんな木が植えてあるけど、みんなちっちゃな木ばかり、こんなの木のうちにはいらねえや」と言ったのである。思わず苦笑ってしまったが、なんと当時の私はおおらかであった事よ。今なら、青筋立てて一度は買ったモミジもろとも叩き出してしまふところなのだが…。

実際、この10数年、いつかな怒りやすくなって、身の回り、あるいは世の中一般の悪事に関して、全く許容度が低くなり、毎日が怒りの連続である。その集積が『十三分の一』なる、誇大に言えば、世を憂い、人を憂えるエッセイ集をもたらしただった。

が、一体どうしてこれほど怒りやすくなったのか。答えは全く簡単である。もしかするとそれこそ私の不徳のなせる業であったのかもしれないが、人生の中盤で受けた、勤務先での集中的な、全くいわれなき非道な「いじめ」の結果なのである。それに対する怒りと怨恨こそが、私に「書く」ことへの限らない動機をも

バラ科の果樹「木瓜(ほけ)」の苗木を買った。これと同じバラ科の梨・リンゴを接いでみようと思ったからである。我が家庭果樹園には、リンゴと梨をつないで、一樹でリンゴ3種類、梨5種類が収穫できる自慢の果樹がすでに1本あるが、あまり高木にはならない木瓜につなげば、春と秋のよき季節に異種の花と実が見事に照り合わせる光景を楽しみ、かつまた、もっと年寄りになっても果実を容易に採取できる幸せを享受できるのではないかと欲張る気持ちがふつふつわいてきたからである。実はしかし、もちろん同じバラ科でも、木瓜に梨やリンゴがつながるかどうかは(識者・専門家に聞けばすぐわかることだろうが)、全く知るところではない。また、それ以上に困ったことは、手狭な我が庭園果樹園はとくに、盛りたくさんの果樹どもでいっぱい、一体何処に植えればいいのか。近くのホーム店に行つて、買うまでは意気盛んだったが、帰路の20分ほどは、そのこと

たらしにくれたのであるが、それまでの私のパーソナリティを一変させ、小事でも大事でも、何事によらず悪事に対しては忍耐心無くひたすら憤る傾性を身につけさせたのだった。

長々つぶやいたが、結局思案して言いかけたことは、「いじめ」は人の心を歪めこそするが、人をして正義に目覚めさせ、悪と戦う心根を養う、功罪相伴う結果をもたらすということである。特別に強調するまでもなく、世には終わりのない「いじめ社会」である。いじめによる自殺や諸々の精神疾患、人生からの回避・逸脱といった話は後を絶たない。身にしみて、万感の思いで悼み、また同情するところである。が、こうしたいじめ被害者の方々が、一步視点を変えて、負けて卑小な人物に成り下がる敗者にのみなるのではなく、正義に目覚め悪と戦う精神をもたらせてくれる絶好の機会と受け止め、大いなる成長への足がかりとしてくれることを、心の底から願うので

*** ネット社会の功罪**

とうとうこここまで来たか、というへ達観。京都大学の入試で、受験生がネットを通じて試験問題を開示し、その回答を得るべく、「ヤフー知恵袋」なるサイトを利用して、司法当局に逮捕された事件である。

ネット社会は便利だ。後期高齢者に到達したこの私だって、このところ買い物過半はネットを通じ、列車・飛行機・ホテルの申し込み、その他諸々の送金もほとんどネットである。また、ちょっとした知識を得たいときには、少しばかりあやふやで危険な情報ではあっても、ヤフーやグーグルなどの検索エンジンを巧みに使いこなせば、ついにはなかなかの情報を得ることが出来る。買い物情報、健康・医療知識、世界の政治・経済・文化の、またスポーツの情報など、新聞・テレビで与えられるそれとは、質量ともに

用い方一つで、周知のごとく、アラブ諸国の反政府運動を、今や歴史的な革命力へと押し上げるほど、強大なものになりつつある。

こうしたネット社会に生きるには、実は大変な自制と謙虚が求められる。一歩間違えば、他人を傷つけ、死に追いやることさえある。よくそのからくりを知らないが、いわゆる裏チャンネルなところではいられない誹謗を受け、自死に至ったケースさえ聞く。この私だって、大学教官時代、「変態教授」などと書き込まれ、正しく厳しく成績評価をすることの恐ろしさを体験している。ネット社会の匿名性は自覚的、また無自覚的に他人を攻撃するのにもってこいの環境を整えている。こうした、匿名なるをよしとして他者を攻撃するタイプを「反社会的犯罪行為」とするならば、此度のカンニング的行為は、その対極にある「非社会的犯罪

*** 拝啓、政治家諸君殿。一致団結とは、大義のためにまとまることです。**

前原外務大臣が辞任した。禁止されている外国人からの献金問題の責任を取ってのことと聞かすが、まことに情けない。今、日本は、戦後史上極大に多難な国際的な政治・経済問題を抱えている。このようなとき、ころころと首相が代わり、大臣が替わって良いものか。とりわけ、外務大臣の責務は重大を極めている。後押し国のアメリカは愕然とし、領土問題で日本を圧迫する中国・ロシアはきつとほくそ笑んでいるに違いない。

昨今、一致団結という言葉が馬鹿の一つ覚えのようにあちこちに蔓延し、政治の世界においてもまたしかり。が、かれらは一体、一致団結の意味を知っているのだろうか。真の一致団結とは、小義をもってまとまることではなく、大義を

もって、目的達成のために滅私奉公すること。一例を挙げれば、江戸幕府倒壊をなした薩長連合であり、その連続線上にある、薩長土肥出身者らによる明治維新政府であろう。薩長土肥の藩閥出身者たちは、その後藩閥闘争に明け暮れることはあったが、我が日本国を、欧米諸国と肩を並べる国にするという大義の下には水面下ではよくまとまり、ついには江戸幕府が結んだ不平等条約なども廃して、周知のごとく、日本国をして世界の一流国への道を拓いた。

翻って、眼下の政治屋諸君の有り様はどうだ。小さな派閥、小さな政党の保存と我が身の保身という小義のためにのみ結束し、国を忘れ、国民不在の小権力闘争に明け暮れ、ついに我が日本をGDP 3位におとしめ、目下ますます凋落の道を突き進ませている。こんな折、外務大臣辞職とは何事ぞ。

安部元総理大臣が、病気を理由に逃避的辞職をして以来、辞職を迫り、また辞

職を行うことが、殆ど罪意識なく安易に行われるようになってきた。今置かれてある日本の国際的立場を思えば、これ以上の政治家たちの不団結は許されない。この困難時に、心ある政治家諸氏が「一致団結」の正しい意味と意義を学び取り、たとえば政党・党派を超えて前原大臣の復職を諮るなど、我が国再生の源となる「一致団結」の模範と道しるべを示すと、夢物語だろうか。(11・3・7)

ネット訪問者の拍手2

*** 今こそ武士道精神**

一人、一軒、一口分の志を!

なんたる惨状、なんたる災害。第二次世界大戦の終了末期に、日本全土を焼き尽くすかに襲ったB29の爆撃と原爆投下、私たちの親やきょうだいや同胞が生死の境を逃げ感った史上稀有なる大惨禍に劣らない。被災者の現況と心情、慰める言葉など、どこからも浮かはずもない。そのような中であって、誰をも恨まず、ひ

たすら耐える同胞被災者の皆さんのけなげな姿には、むなしくも涙するだけの我が身を嘆く。

このようなとき、台北発の産経新聞の記事(山本勲)には、感動し、慰められ、また啓発された。親中派でむしろ反思想の持ち主でもある台湾の著名な評論家の南方朔(本名・王杏慶)氏が15日付けの台湾紙「中国時報」のコラム欄で、未曾有の大震災に見舞われた日本の国民や各界の対応を絶賛、「武士道精神の日本が災難に打ち負かされることはない」と最大限のエネルギーを送っているというのである。その理由として「超大地震と津波に見舞われた日本で(米ニューヨーク大停電やカトリック災害時のような)商店略奪も起きず、すべてに秩序が保たれていること」を挙げ、賞賛している。そして、その精神的基盤の原点を新渡戸稲造が指摘した「日本独特の榮譽を重んじ、恥を知り、礼を重んずる特性」、即ち「武士道精神」に求めている。その上で、

「日本はいま、全世界のかわりにもっとも尊い試練に立ち向かっている」と結んでいる。

私たちが忘れかけていた「武士道精神」。よくぞ指摘してくれた。今こそその精神で国民一人一人が「一致団結」するときだろう。何も難しく考えることはない。武士は食わねど高楊枝、武士は相身互いという。国民はこれまた経済貧者の続出する経済苦境のただ中にあるが、そのようなときだからこそ、まさにその武士道精神が生きてもくる。もし、一億国民の十分の一、一千万の一人ひとりが、あるいは一軒一軒が、分に応じてこぞって一口分の浄財を拠出すれば、そしてその一口分の平均が一万円に達すれば、最低でも総額一十億円以上となる。また万一、ゆとりある層が数口分も負担すれば、一兆円にだって達することが可能である。本格的な援助はそのあと政府・行政に委ねるとしても、とりあえずの緊急支援を、国民が無言の内に一体化して行う。これ

こそ武士道といえるだろう。

世界が注目している。不言実行、一千万人参加の支援と団結、まずは郵便局に走って、赤十字あるいは共同募金会への一口分の寄付行為から、支援と団結のスタートを切り、被災者の皆さんを応援したい。
(11・3・16)

*** 大震災被災の方々、がんばってください。国中で、応援しています。**

大震災で被害を受けた方々へは、お慰めする言葉もありません。が、私たち日本人はみな、人間中の人間です。下の文章は、私が送った見舞い状に対する被災地からの返信ですが、お読みいただき、心の支えの一つにしていただければ、と思います。苦難の中にあつて、なお人々を思う気持ちに溢れています。皆様にも、いずれ国全体からの応援が形をなして、伝わっていくはずで。耐え難きを耐えて、辛抱してください。

お手紙頂戴いたしました。

ご心配下さいまして、ありがとうございます！ こちらは一家全員、またそれぞれの家族も無事でした。八戸は津波の被害が大きく、たくさんの方の家や船、工場が流されました。亡くなった方もいます。

私の家は、津波が押し寄せた八戸港から4キロほどのところにあります。岩手や宮城のような、10キロにも達する津波にみまわれていたとしたら、どうなっていたかわかりません。自分の命は、たまたま助かっただけだと思っています。

あの日、大きな揺れが数分間も続き、直後に停電しました。それから数分おきに何度も何度も余震が来て、1歳の息子はその度に私にしがみついたり、半べそをかいていました。

夫は市役所勤務です。地震以来、何日も帰ってきませんでした。余震が続く真つ暗い部屋で、息子をしっかりと抱きかかえながら、寒さと不安の中、朝が来るのを待ちわびる日々でした。

数日してやつと電気が復旧し、ニュースを見ましたら・・・。

何ということが・・・。
目の前で家族が流された人、大切な人を守れなかったと自分を責め男泣きに泣く人、両親の形見すら何一つ残っていないと泣く夫婦、避難アナウンスをしているパトカーごとのまれてしまったおまわりさん、支援物資の不足を涙ながらに訴える首長さん、10日ぶりの温かい食事に涙を流す避難所の人々。家の中に居てさえ寒さで眠れなかったのに、避難所の寒さはどんなに伝えることでしょうか。

息子は新生児の頃、1日に15回もウンチをしていました。紙おむつが届かないお母さんはどんなに辛いことでしょうか。暖房どころか毛布さえ不足している氷点下の毎日、1日1個のおにぎり、水を流せないトイレ、放射能の恐怖。家族や家を失ったうえにこの仕打ちです。なんて残酷なんでしょう。

「家族の無事が確認できたからこそ、安

心して災害対策の任務に専念できた」と言う夫。家族の安否もわからないまま、救助や避難所の激務をこなす職員さんの気持ちや避難所を思うと切ないです。また、私も夫の体調だけを心配していれば良いのですが、自衛隊や原発の暴走を阻止すべく闘っていらつしやるみなさんの奥様・ご家族はどんなお気持ちで待っていることか。放水隊の隊長さんの涙の会見に、胸がいつぱいになりました。辛くて仕方がないのに、ニュースや新聞から目を逸らしたり、耳をふさいだりすることもできず、毎日涙を流しては胸がつぶれる思いをしております。

地震以来、食欲が落ち心から笑えなくなりまして。今起こっていることが、私だけが見ている悪夢であつたら良かったのに、と何度思ったことでしょうか。

先生、今はそのことが辛いです。八戸は、灯油やガソリン、食料が不足しています。先日は5時間も並んでやつとガソリンが10リットル買えました。で

も、一部の店舗ですが、少しの野菜やお米が店頭に並ぶようになりました。多少不自由はしていますが、大丈夫です！首都圏のほうが、計画停電で大変なような印象を受けます。こちらと同じように食料品や燃料が品薄になっているようです。

もしお野菜が不足するようでしたらお知らせ下さいませ。東北道が開通しましたので、青森県産の新鮮なお野菜をお送りしたいのです。……

首都圏の電力制限、物資の不足なんて、戦後の混乱、此度の震災地を思えば、「贅沢」な悩みに過ぎません。政争や権力闘争などやる暇、かけらもないはず。

一刻も早い、被災者・被災地への救援・援助活動に向けて、政府・自治体の行政機関が、それこそ死にもぐるいで一致団結した活動をすべきです。一致団結とは、スポーツの世界などで軽々に言う「戯れ言」ではないのです。がんばれ、政治家、

*** 東北大震災・緊急提言： 日赤よ、
急げ。1世帯100万円の緊急見舞金を！
悪夢の中の被災者に、もたらせ、夢と希望と現実を！**

現実的な緊急支援こそ、喫緊の課題。日赤よ、「赤十字」の意味を今こそ問い直せ。未だに具体的な支援活動を起こしていないとは何事。さまざまな思惑で、後手後手に回って事を大きくしている東京電力の前線を踏んではならない。家族を失い、肉親を失い、家も持ち物も一切合切なくしてしまうという、深刻きわまりない被害を受けた方々にとって、まずは先立つものがなければ、現実をスタートさせることなど、出来ようはずもない。

今緊急にもっとも必要な支援は何か、日赤はそれを考え、理解しているのだろうか。未来へ向けての夢と希望は、まずは現実生活を一步でも進めることを可能に

する現実的な支援である。ある地方自治

体の、住民に対するわずか5万円ほどの、併し精一杯の現金支給が、皆さんをどれほど力づけたか、テレビの画面で見るとでもない。私たちは、のろのろ運転を支援するために、走って、好んで、日赤に義援金を集中させたわけではないのだ

世界も驚く、被災者の方々の、絶望状況の中での整然たる忍耐。これに甘えて、支援活動を遅らせるなど、義援活動を行っているたくさんの人々に対する裏切り行為でもある。忍耐にも限りある事を知り、もっとも多額の義援金を集めている日赤は、今何をすべきか、深刻に反省し、現実的かつ具体的な緊急の支援活動を、即刻に開始しなくてはならない。

(未完にして未完) (11・4・1日)

*** 大震災、「死」を厳粛に悼もう。詩
人たちよ、がんばれ。**

「もういゝと残し逝きけり花菜漬

今日届いたある仏教団体の機関紙の俳句欄に特選句として載っていたもの。死は誰にも訪れる厳粛な出来事である。この死を「花菜漬」一点に、夫婦の人生と歴史を焦点化し、昇華した、残されし妻の悲しくも美しい名句である。人の死は、このように、常に正座して肅然と受け止められてこそ、尊厳に満ち、人をして感動させ、それが翻って悲しみの渦中にある人(作者)に生きる力となって戻る。こうした意味をも持つ人の死を、茶化したり、諧謔したり、あるいはものの喩えに使うなど、けっしてあってはならないことだろう。

この度の大地震災によって亡くなられた人の数は計り知れず、それを悼む心は、遺族のみならず、国中、いな世界中に広がっている。そのようなとき、「日本人のアイデンティティは我欲。この津波をうまく利用して我欲を一回洗い落とす必要がある。やっぱり天罰だと思ふ」と

言った石原都知事が大いにひんしゆくを買ったのも、けだし当然のことではあった。私は運よく難を免れたが、東京を焼け野原と化した一九四五年3月10日の東京大空襲、累々たる被災者、そして敗戦に至るまでのおびただしい兵士たちの死、そういう尊い犠牲の上に、たくさんの人々の艱難辛苦があつて、今日の日本は築き上げられてきた。それを思うとき、石原都知事は、もっと奥深いところに照準を当てていたに違いないが、軽率のそしりは免れない。

かつて、パブル気分も色濃く残る頃、「忘れちゃえ赤紙神風草むす屍」という俳句を見て、慄然とした。もしかすると石原都知事は、こうした精神を生み出したきた経済・文化、そして乗りすぎた人々を諷めたかったのではないかと思われるが、この度の災害で命を落とした人の数と悲惨さは筆舌に尽くしがたい。私の近くにも、「ご親族を家ごと人ごと奪われてしまった方もいるが、こうした有様、

こうした悲惨な出来事に対しては、どれほど年経た後でも、それがどんな意味を持たせたものであつても、けっして「忘れちゃえ・・・」などという言葉は、出そうにも出せるはずもないのである。

言葉には、計り知れない説得力と魔力がある。被災者の方々には、言葉よりも先に、現実に生きていくための、希望を持つてもらうための資金こそ喫緊の支援であるが、しかし、言葉による文化的、精神的な支援もまた、それなり大きな力を持つことは間違いない。今、最も多くなされている支援筋は、音楽やスポーツ関係者のようだが、言葉(詩・うた)による応援もなお、求められるものではないか。俳句でもよい、短歌でもよい、詩でもよい。文化芸術者たちが、遅ればせながら立って、倫理的にも洗練された、その言葉の力で、被災した方々、いな、日本全国を励まし、力づけてほしいものである。

(11・4・5)

*** 「若者に責任を引き継ぎたい」。甘
い常套文句に気をつけよう、これも危険な美辞麗句。若者よ、ご注意あれ。**
自分と周囲の仲間たちの出した本を自ら出して世に訴える、そんな気ままな出版社を興しての第一号作品刊行に四苦八苦。この3年、とりわけ終盤この3ヶ月の苦難の果てによりやく越えた茨の峠道。やつとの思いで終着してほっと一息である。その間、東日本大震災の国難来たり、やむなく心情吐露したこのブログ欄。あれやこれやのつれづれ話に戻ろうと思つた矢先、聞くに堪えない、見るに堪えない、そして看過できない、時の総理大臣と震災対策問題を焦点にした政界のごたごた劇。逆戻ってまたまた関連の出来事に一筆啓上とはなつた。
いったい、この阿呆劇のような、やめるやめない、やめるやめようの茶番劇は、何なのか。福祉を切り捨てた石原都知事については決して全幅信頼、また好意を

抱くところではないが、震災対策にまごつく政府与党を評して彼曰く「民主党の連中は、みな未熟者だ」には全く共感する。が、それよりもっと、今や、国会議員(けっして皆ではないが)はなべて未熟者だと、言ってみたくもなる。現下の日本の経済状況、国際境遇を真に憂うれば、総理不信任案を政争の道具に相争う時ではない。日本がこのまま、不幸な震災被害者を救うことなく経済大不況、国際地位の暴落に陥るなら、政争の首謀者、追隨者の別なく、彼ら国会議員はみんな首を繋げて監獄行きでなければならぬ。そのような罪意識のかけらも、今の政治家諸君にはないのだろう、きつと。

それにしても、総理大臣・菅直人という人、あんなにも二枚舌、3枚舌の人物とは、夢思わなかった。不信任案投票に入る前の民主党代議士会で、驚くべき言辭を弄した。「震災対応などで一応のメドがついた段階で、若い世代に責任を引き継いでいただきたい」。これは一体何

だろう。かつて私が勤務していた大学の学長さんが言った言葉を瞬時に思い起した。「若い世代にこそ期待が持てる。50代、60代ではこの大学の将来は担えない」と言っている人は、ライバルとなり得る世代を突き放して巧みに「若い」世代を持ち上げて取り込み、己の失点の追求を押さえ、学長を2期つとめ、さらに既存の規定を変えて、学長3選を可とする新しい学長選挙規定案を自ら教授会に提出した。彼は、学内で生じた誹謗文書事件で、気に入らない人たちをいわれなき嫌疑をかけて苦しめ、一方、他の不祥事件では、詭弁を弄して自らの責任を取らなかつた。

菅さんの代議士会における演説は、この時点で、とつくに先が見えた。辞任の意志など全くない曖昧模糊たる「一応のメド」など、今更その意味など問うても所詮、せんないことである。こんな子どもだましの言い回しに、「若い」世代がちよろまかされて、声高に叫んだ不信任

案賛成を鞍替えて(否、その後少しはあめ玉をもらえるかと) 即座に総理信任に回るなど、元々、主義も理念も何もない未熟な代議士諸君だったのである。そんな中で、首謀者O氏、H氏らの敵前逃亡を見ながら、一念を通した二人の民主党議員には、深甚なる敬意と一抹の救いを感じることから、妙である。

ともあれ、「若者に責任を引き継ぎたい」といった、「若者」を「馬鹿者」と見くびり持ち上げあげつらう甘い文句は、誠意も節操もない無責任な手練れ人間の用いる常套手段。老人を持ち上げあげつらう事も含めて、これらの危険な「美辞麗句」を臆面もなく言いつのる者には、若者・老人に限らず、我々はみなよくよく気をつけねばならない、と改めて実感させられた此度の菅さんの劇場演説ではあつた。

(11・6・4)

ネット訪問者の拍手2

* 見做すべし、「なでしこジャパン」

の一致団結(女子サッカーW杯)

いつこんなに強くなったのだろう。サッカー女子「なでしこジャパン」。が、まだまだ技術的には、打ち負かした相手の国々の選手たちよりいくつも劣る。例えば、ハットトリックを演じたチームの柱、澤穂希選手でさえ、1対1でボールを奪われ、易々と相手に抜かれて後を追う。体型的に足の長い相手だからというのはいり。そういう体躯的条件を込みにして、技術は総体としてあるのだから。それにしても何故強い、「ナデシコジャパン」は。一体その強さの理由は何だろう。

しかし、それも実に簡明・平易なことだ。秘訣は、ただひたすらの一致団結の一本道にある。男子サッカー・ジーコジャパンが二〇〇六年W杯で無残に敗れた時、あまりの不甲斐なさをなげいて、日本社会から日ごと年ごとに薄れゆく一致団結力の欠如を敗因として挙げ、その対比として見事に一致団結した「なでしこ

ジャパン」を挙げてみた(『ジーコジャパンの敗因』琅19号)。その後、いつの頃からか、「一致団結」を金科玉条のように言い出す風潮が男子サッカー選手たちはおろか、政治家諸君の間にさえ広まったが、しかし、見るところ、男子サッカー選手の試合ぶりや、政治家諸君の政争ぶりからは、一致団結など言葉の上だけ、無残にも未だ遠しといわざるを得ない。彼らの多くは、隙あらばシュートを放って名を挙げんとの色気がからだごとにもじみ出し、(能力・技術を越えた)身の程知らずの雑言・暴挙(シュート)に出て、あたらチャンスをつぶし、組織の弱体化にのみ貢献している。比べて、此度もなでしこジャパンの各選手は抑制のきいたチームプレイで、皆ひとしく決定的チャンスを待ち続け、つくりつづけ、そして時機到来に際しては、誰が打つのも自由平等、ここぞとばかりにゴールを狙う。たとえはずれたとしても、見ていて実にはすがすがしい。そんな中で、逸材

の若きFW岩淵真奈選手など、少し過剰な連携意識が災いし、むしろ好機に身を退き気味で、惜しくも功名のシュートチャンス逃すなどしているが、それもよし、我が身の立ち位置、他との関係性の中でもまれ苦悩してこそ、やがて必殺の技術も身につくというもの。今のなでしこジャパンのメンバーはみな然り、こうして首尾一貫、過去から未来に渡って「一致団結」。かくして、我が身と周りを最大限に活かす技術と力、即ち「連動性」と「連帯力」を培ってきたのである。1試合1試合、なでしこジャパンの試合ぶりは、勝っても負けても、個の力、全体の力を常に体現して見せてくれる。ほればれするチームである。

比べてどうだろう。男子サッカーチーム、そして政党というチーム。多くは言うまい。気の利いたげな見映えのする戯れ言を吐く前に、まずは我が身を省みて、猛省すべし。ザックジャパンなど大きな期待など持てようはずもないし(ただし、

監督は優れているようだ(が)、まして政
 党諸君には、絶望する、ちようど、ロシ
 アが、日本の政治無能力について、北方
 領土共同開発案など持ち来たし、4島の
 実効支配はおろか、名実ともに永久領土
 化する妙策を打ち出してきた。政治の、
 また政治家の、彼我の資質の差はあまり
 にも歴然としている。ロシアを無法とい
 うは容易いが、国際政治というもの(と
 りわけ武力戦争が出来なくなった近未来
 の国際戦争では)、かくなるものである
 う。哀れや日本。これが男子サッカーご
 ときのものなら、素人評論して笑って傍
 観できるが、現下、日本国は、あちらこ
 ちらで、原発事故災害ならぬ、政治災害
 に見舞われている。心しよう、国民、一
 人一人……。と呻吟する昨今である。

(11・7・2)

ネット訪問者の拍手2

*** ヤクザ以下の虫けら議員―何某復
 興担当大臣とやら、被災地で365日無休で**

働きなさい。

嗚呼、なにを可言わんや。石原都知事
 は、大震災復興事業に右往左往する民主
 党議員諸氏を総称して「未熟者」と吐き
 捨てたが、此度のなんとか復興大臣とや
 らの暴言は、未熟者どころか、権力機構
 の上にどっかりあぐらをかいて、何もか
 も承知の上での、あの傲岸たる態度。も
 はやヤクザ以下である。いやいや、私は
 中学・高校時代を男っぼい九州の炭鉱地
 帯で育つたことを大いなる誇りにしてい
 るが、その間、多少はヤクザの世界を垣
 間見、また触れてもきて、私の知る「ヤ
 クザ」は次郎長の世界にも通じる人情と
 仁義の篤い世界でもあった。ヤクザ以下
 などという言葉はもつたない。猥同然
 人間以下である。長々言うまい、こちら
 が汚れる。被災地の知事さんを前にして
 思い上がったものの言い様・態度、その
 中身。例示して解説するのも汚らわしい。
 こんな連中が、国民の支持を得て国会議
 員になっているのかと思うと、これを選

敗戦を予想させた。1対1の対峙を見て
 もすぐに分かるように、日本選手の個人
 技は、体躯的制約からも、ヨーロッパ諸
 国の選手に比べてまだ大きく見劣りして
 いる。気負って、連帯力を弱めた戦いで
 は、とても体格・個人技に勝る外国チー
 ムに勝てるわけがない。私が敬愛し続け
 てきた「なでしこジャパン」ほどのメン
 バーでも、「連帯」という初心を忘れる
 ことがあるのか、試合終了後の各選手た
 ちのインタビューにおいても、それに対
 する内省の弁は誰の口からも出てこな
 かった。これでは、陣形も崩れ、肝心の
 守備意識もちぐはぐとなり、赤子の手を
 ひねるように苦もなく相手にひねられて、
 当然の結果ではあった。

野球やバレーなどの集団戦、テニスや
 柔道などの個人戦、どんな態様であれ、
 大勝した後の試合では、つい初心を忘れ
 て、雑になって自滅する。これはプロも
 アマも、大人も子どもも、いやいやスポ
 ーツに限らず、どんな世界においても普

遍の出来事である。その根源の理由は、
 即ち「初心」を忘れてしまうことである。
 昨今では、我が国政道における「民主
 党」の墮落・凋落がその典型的、代表的
 事例であろう。が、もともと彼らに「初
 心」といったものがあつたか否かは、ま
 ことに疑わしい。政権を奪いたくて、野
 党時代に耳障りのよいことを政策として
 並べ立てていただけだったとしか、今に
 しては考えられない。初心とは、底の底
 に真の哲学・理念が埋まっているもので
 あり、そうであればあれほど見事に「変
 質」するわけが無かるう。

なでしこジャパンが体現していた「一
 致団結」と「連帯力」は、身体的にも劣
 る日本女子サッカーが世界に伍するため
 の、ほとんど唯一最大の武器。そしてみ
 んなで必死に保ち、築き上げてきた「初
 心」であつた。それは単なるスローガン
 や商業カタログなどではけつして無かつ
 たはずである。資源に乏しい我が国をし
 て、一九四五年、戦後の悲惨のどん底か

んだ人たちへの人間不信にも厳しく通じ
 る。今や国の内外は、政治災害的国難に
 満ちる。これを解決するには、国会議員
 に人を得る以外に道がないのがまつたく
 悲しい。次こそは、平成維新を起こしう
 る人を選ばなくては、本当に国が減びる。
 嗚呼、…後は絶句…。(11・7・5)

ネット訪問者の拍手2

*** 初心忘るべからず―「なでしこジ
 ヤパン」の敗因**

W杯女子サッカー、決勝進出グルーブ
 1位をかけたの対イングランド戦で、な
 でしこジャパンは大した見せ場もなく、
 無残に敗れた。先の試合で予想外の大勝
 をなし、勝たねばならぬ、勝って当然、
 勝てるはずだ…等々、いろいろな思い
 で気負つた面もあるうけれど、開始直後
 から見られた、ちようど男子日本代表の
 ひと頃見せていた俺が俺の気負いよ
 しく、機熟する前の強引なシュートを放
 つ戦いぶりを彷彿とさせる展開は早くも

ら立ち直り、立ち直らせてきた「国民的
 初心」は何であつたか。混迷を極める政
 治災害によって、東日本大災害に打ちの
 められている方々を中心に、深刻な国難
 状況がもたらされている。こうした中に
 あつて、「なでしこジャパン」は、人が
 与(くみ)するときのあるべき理想の姿
 を示すことよって、今や、夢と希望を
 もたらす正道な国家的アイドルでもある。
 次の決勝トーナメント1回戦では、「初
 心忘るべからず」。一致団結と連帯の精
 神は、すべての前進と復興の要、それを
 国民全体に、今一度体現・具現してもら
 いたいものである。(11・7・6)

ネット訪問者の拍手1

*** なでしこジャパン、お見事!**

次は「勝つて兜の緒を締めよ」
 女子サッカーw杯ドイツ大会、決勝ト
 ーナメント1回戦。期待したとおり、予
 想したとおり、初心を取り戻したなでし
 こジャパンは、守るも攻めるも、見事に

固い糸でつながるチームワークで、耐えに耐えて、1点も与えず、そして珠玉の1点をもぎ取り、快勝した。言うことなしの、すばらしい全員挙げての戦いである。うち沈む日本全国に、未来のあり方を教示し、勇気を与えてくれるこの最高の「日本女性アスリート」たちに万歳を送り、また次なる試合、準決勝に向かって、「勝つて兜の緒を締めよ」の格言をひそかに贈って、さらなる快勝を期待したい。これは、一個人の単なる期待ではなく、日本全国国民の期待でもあるだろう。

*** 蛇足**

珠玉の決勝点を叩き出したのは、澤選手からの比較的長い巧妙な斜めパスを受け取り、敵方バックスをかわしてこれまた極めて難しい角度から相手キーパーの横を抜く絶妙のシュートを放った丸山選手だが、彼女の試合後の言葉が、なでしこジャパンの真髓を語っている。「岩渕真奈選手が良いボールを出してくれたので、後は決めるだけだった」。一瞬言い

出は必至。理由はのちほど。

(11・7・12)

*** なでしこジャパン決勝戦予想**

1対2で惜敗

こんな戯れをするのは、真剣勝負を行っている選手の皆さんには大変不遜なことであるが、準決勝の予想が見事にびつたり的中してしまった。おもしろがって周囲の幾人かが、では決勝戦は？

ときた。試合は数日後なので少し早いが、さまざまな要因の上に立ち、またさまざまな意味合いの期待も込めて、上のように予想してみた。もちろん、これまでに見せ、準決勝で最高レベルに達した感のある「一致団結心」と巧みな「パスワーク」に基づく「運動性」が発揮できたら、(そしてアメリカチームに多少の乱れが生じたら) 2対1、いやいや、3対1の勝利だつてあり得るだろう。チーム・なでしこジャパンには、今大会、もう十分過ぎるほど楽しませてもらった。

間違いかとも思ったが、よくよく振り返れば、これは、澤選手とともにフィロド中央にいて相手ゴールを背に後方からのパスを受ける姿勢の岩渕選手を視野に入れ、瞬時に、岩渕選手が(功名心にはやることなく、自分で無理筋な前線突破をすることなどせず)ゴールに向かって全体を見通せる体勢にいた目前の澤選手にボールをつなぐ事を予測し、澤選手の次なるパスをもらいやすい好位置に走り込んでいったそのときの状況を見事に物語っている。これは、日頃から連携こそ命と心がけ、常に全体の中の自分と他者のあり方・関係性を頭に置いていなければ生まれ得ないチームの運動性であり、表現である。再び、三度、なでしこジャパンには感動させられた次第である。

(11・7・10)

*** なでしこジャパン準決勝戦予想**

3対1で勝利

我が愛するなでしこジャパンの決勝進

これ以上望むのは、無い物ねだりをするようなもので勝手すぎる。が、欲を言えば、数段格上のアメリカチームとの最終戦では、勝ち負けなどにはこだわらず、メンバー全員、チームのために我欲を捨てた崇高なる闘魂「大和魂」を見せてくれれば、というところである。

(11・7・14)

*** なでしこジャパンに勝利の女神が。W杯女子サッカー決勝、「一致団結」と「連帯力」の大和撫子に勝利の女神が微笑む。**

いやあ、それはそれで楽しんだけれど、延長戦も終了間近、最後に澤選手の値千金絶妙のゴールが見事決まるまでは、1対2の悪しき惜敗敗戦予想が当たるのではないかと、ハラハラドキドキの連続だった。しかし、勝利の女神は、最後まで望みを捨てずに堪え忍んだ大和撫子の大和魂に微笑んだ。試合終了後の選手インタビューはすべて感銘的だったが、と

りわけ丸山桂里奈選手の「震災被災者の皆さんの復興に向かう姿に力を与えてもらった」には、思わず涙がこぼれた。「被災者に力を与える」とか「被災者を慰める」とかいった、聞くだに腹立たしい傲慢なスポーツ選手や芸能人や政治家たちの発言が渦巻く中で、ひとときわうるわしいコメントである。アルバイトで生計を立てるなど、経済的にも苦しいと言われるなでしこジャパンのメンバーが苦難を乗り越えた末に述べるからこそ、此度の震災被災の方々を真に力づける重みある金言となる。

試合の内容は、実力的に数段勝るアメリカチームに圧倒され、負けてはいた。しかし、勝利の女神は、一致団結心と連帯力と我欲を捨てた闘魂に対して栄冠をもたらせた。この勝利の女神は、きつと震災から立ち直ろうと必死に戦っている方々へも、いつか微笑んでくれるに違いない。それに繋げるためにも、願わくば、なでしこジャパンの皆さんは、試合後の

疲れを癒やす間もあらばこそ、被災地に足を運んで、勝利報告をしてほしい。これこそまさに、被災地・被災者の方々に真に力づけ、喜ばせる基になるだろう。そしてまたもう一つ、願わくば、「よく頑張った、一致団結の勝利だった」などと言う資格のない昨今の為政者や政治家などを表敬訪問する愚を避けてほしいものである。

(11・7・18)

ネット訪問者の拍手2

*** 救いの神に祈る**

☆ 後期高齢者になった。市役所の健康福祉部・高齢者支援課から「重要書類です。必ずお読み下さい」という通知書が届き、開けてみると、「あなたは後期高齢者の資格を取得されました」とある。

何事かと読み進んで、驚いた。資格を獲得するということは普通、何か特典があるということだろう。が、中身は全く違つて、後期高齢者になった誕生日以降、次年度開始までの3ヶ月間、すでに払い

込み済みの国民健康保険料との差額分、毎月3万なにがし支払えという通知書なのだ。数ヶ月前、高校同期の友人が、後期高齢者になった途端、健康保険料が大幅アップしたと憤慨していたが、そのときは何かの間違いだろうと高を括っていた。が、偽りどころではなく、それは真(まこと)の真の話であった。念のため、市役所の係に電話したところ、係の吏員の曰く、「私達はずっと高額の保険料を負担して、後期高齢者の増額する医療費を支えています」。このコメントも、実は同様に、友人が関係諸機関に問い合わせた際の、さまざまに応答されたひややかな反応と全く一致する。

高齢者になると、高まり募る生病死の苦しみに加え、さまざまな面で社会的に差別化され、痛みが増す。この境涯の変化に適応していくことが、哀れ、老後の課題である。

☆ 長年、妻と二人でライフワークとしてきた「カラー・ピラミッド・テスト」

という投影法検査に関する入門書を過日、自ら興した極小出版社(書肆彩光)から刊行した。老齢期に入って、数年がかりで書き上げた、まさに骨身を削った愛着の書だが、ついに刊行の出版社が現れず、まさに絶望の中から探り出した航路であった。それがしかし、おもしろい。さまざまなネット書店や取次店がけんもほろろの応対の中で、米国を本社とするネット書店最大手の「アマゾン」だけが、書籍の商品登録を受け入れ、ネット販売への道を開いてくれた。細々ながら、読者も現れ、私達の生涯と、国際的にも衰退しているこのテストの先行き(国際的復活)にはるけき光明が灯ってきた。捨てる神あれば拾う神あり。いつか体験してきたことだが、今更ながら、身をもつて味わう金言である。

☆ 本年(二〇一一年)三月一日。この日は、今生を紡いでいる日本国民にとつて、生涯忘れてはならない、いや、忘れられない日となった。東北・東日本大震

災と原子力発電所事故。加えて、これ以上ない職業として「政治」を選択してきた不道徳なる政治屋達による事後の政治災害によつていや増すばかりの苦難と苦痛に苛まれる我が同胞被災者の方々。慰める言葉とてない。無念ながら、義援金を送る以外に術を持たない私達には、せめてこの方々へも、いつかきつと拾う神が現れることを信じ、祈り、願うばかりである。許されよ。(11・7・31)

ネット訪問者の拍手1